

『地球の落とし穴』

広瀬隆

文春文庫 文藝春秋／2003年
定価 690円(本体 657円＋税 5%)

ケアフルな一冊

便利になって文化が消えた？

坂田三允 (群馬県立精神医療センター看護部長)

ゴールデン・ウィーク中、毎朝、もうすぐ1歳になる孫を抱いてちょっと遠出の散歩をした。旧中仙道を歩く。しかし、歩いている人はほとんどいない。ときどきすれ違うのは「ウォーキング」が目的と思われる老夫婦で、黙々と足早に通り過ぎていく。でも、私は道路沿いの家の庭に咲いているつつじや三色堇、山吹、こでまりを「きれいだねえ」と、孫に話しかけながらぼーっと眺めたり、「いい天気ねえ」と言いながら空を仰いだりした。なんだか忙しい忙しいといっている自分を馬鹿らしく思ってきた。

さて、『地球の落とし穴』である。著者は『東京に原発を！』で有名な広瀬隆。本書は11章から成る。語られるのは「インターネット中毒者への警告」「世界の株価を操る人々の物語」「遺伝子組み換え技術への疑問」「破防法や盗聴法が意味するもの」「ゴミ問題」「原発問題」などさまざまである。しかし、これらの11章の物語を通して著者が語りたいのは、結局のところ「今の日本はおかしい」ということであり、「このままだと日本は滅びる」ということであり「皆でなんとかしようよ」ということなのだと思う。

経済問題や法律の問題は私には難しいけれど、ゴミ問題は日常のことだ。「尻尾をくわえた二匹の毒蛇」の章。日本で1年間に排出されるゴミは数年前でなんと5億トンだという。「四人家族の標準家庭で、十六トン。十六トン積みのトラックが、毎年大晦日になると、すべての家庭から出てゆき、山に向かって走り出すと考えて見ればよい。これが想像の世界ではなく、事

実なのである。このような国家がこれからも生き続けるという幻想は、早く捨てたほうがよい」「われわれは子供時代に、道端に落ちている棒きれでも布きれでも、石ころひとつ針金一本さえ巧みに活かす知恵を自然に習得していた」「現在ゴミと呼ばれているものは、ほとんどがゴミではないのだ。(中略)捨てない文化の体質を、われわれの手足の感覚が取り戻さなければならぬ」

思い出してみれば、子どもの頃、夏になると、母が着物を解いて洗い張りをしていた。もう十分に着古したもので、秋になったら布団を縫う。そして最後は雑巾にしてから捨てる。布団の綿だって、秋には打ち直しをして少しずつ新しいものを加えながら、ちょっと質が落ちると座布団にまわしたりして何年も何年も使った。セーターはもちろん手編みで、身体が大きくなれば何度も糸を足しながら編み直した。器用だった。

でも、不器用な私は布団の綿入れができないし、綿を打ち直してくれるところもほとんど見かけない。第一、化繊の布団を使い捨てにしたほうが安上がりなのだ。でも、セーターは2人の娘に編んで着せた。希望通りの編みこみを入れて。いまは、孫が編んでほしいというけれど、暇がない。流行りのものに振り回されて、そのうちに私の編んだセーターなど着てくれなくなるだろう。

家庭は次の世代を育てる大切な場所、生きることの本質を伝える場所。私は次の世代に語り伝える大切なものをちゃんと伝えているといえるだろうか。

さかた・みよし 2か月に一度この連載を書くのに、四苦八苦しています。ピーンとくる本に出会うまで、結構時間がかかって……。でも、一度手にした本は、最後まで読みます。